

「伝統の原理」に関する研究会

— J. A. ラワリーズ博士を迎えて —

I 経過報告

J. A. ラワリーズ博士は今から約20年前に、国立教育研究所所長の平塚益徳先生を通じて初めてモラロジーの存在を知られ、次に広池千太郎モラロジー研究所所長と出会われて以来、モラロジーに対して常に深い関心を持ち続けて来られました。博士は1975年（昭和50年）に、モラロジー研究所創立50年記念を機に初めて来所され、記念講演「科学・道徳・モラロジー」で日本のモラロジー研究者に深い感銘を与えられました。さらにこの来所でモラロジーへの理解と共感を一層深められた博士は、翌年、カナダのセント・メリー大学での講演でモラロジーを広く紹介されるに至りました。

今回（1977年、昭和52年）は2回目の来所であり、70日余の間日本に滞在されましたので、モラロジー研究所研究部では、ラワリーズ博士とともにモラロジー研究を一層深めるべく、テーマを絞った研究会を企画しました。テーマには、モラロジーの諸原理の中で欧米人には最も理解が難しいものの一つと言われる「伝統の原理」を選びました。

ラワリーズ博士には、予め『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』の英語版と『道徳科学の論文』第14章の英訳文を読んで頂き、来日される前にも数回にわたり予備的な質疑応答を相互に交わしました。

来日（6月2日）されて以降の日程で、「伝統の原理」の研究に関連する

ものは以下のとおりです。

6月4日 伝統祭記念講演「伝統について」(ラワリーズ博士)

以下は研究部主催公開研究会

6月7日 基調講演「伝統の原理と現代民主主義」(ラワリーズ博士)

6月8日 上記の基調講演をめぐる質疑応答と討論

6月21日 基調講演「伝統の原理について」(大塚善次郎講師)

6月22日 上記の基調講演をめぐる質疑応答と討論

7月12日 ラワリーズ博士の提案「最初の試み」、およびそれをめぐる質疑応答と討論

II 研究会における講演・質疑応答・討論の概要

1. 来日前のラワリーズ博士との予備的質疑応答

(主としてラワリーズ博士よりの大沢研究部長宛5月10日付の書簡に拠る)

ラワリーズ博士は、広池博士の前記の著作の中で以下の諸点を、理解困難な点として指摘されました。

(1)神道的な自然および人間性の理解と、それらに対する神道的な反応が、広池博士の思想に大きな影響を及ぼしていること。例えば、日本の国家伝統の発展において、なぜ伊勢神宮が重要であるのか理解できない。

(2)日本の皇室や天照大神を、なぜ敬慕とっていいほど尊敬するのか理解できない。

(3)「伝統」の概念がわかりにくいので、定義をはっきり定式化し、「伝統の原理」が何であり、行為の指針として何を意味しようとしているのかを明確にすべきである。「伝統」とは個人を指すのか、一群の人々を指すのか、あるいはある観念・一組の諸原理・道徳法則を具体化したものであるのか。伊勢神宮のような建物がどうして「伝統」の一部たりうるのか。書物・彫像・芸術作品・山・木・森林などは、「伝統」の構成部分たりうるのか。ガレリホやニュートンなどを「科学的伝統」(scientific ortholinion)

と呼んでいいでしょうか。

上記の3点のうち、(1)については研究部の井出元研究生が、モラロジーの基本的な考えの中には東洋的(神道的)な自然観が受継がれていることを認め、その自然観の特色を解明したレポートを、(2)については同じく研究部の美和信夫研究員が、天照大神、歴代天皇、伊勢神宮は高い道徳的価値を担い、受継いできていること、さらにそれが日本人の精神史において大きな意義を持ち続けてきたことを示すレポートを、ラワリーズ博士に来日後直ちに提出しました。(3)については、来日後の研究会で討議することとなりました。

さらにラワリーズ博士は、「伝統の原理」を欧米人に理解させようとする場合に問題となるであろう点として、次のような諸点を指摘されました。

(1)「伝統の原理」では、身体的・文化的遺伝が強調されているが、現在西洋では遺伝の概念は非常に不評判であり、環境条件のみを考慮する人々が多い。(ただしラワリーズ博士ご自身は、広池博士の考え方を受容されていることが、6月7日の基調講演および討論の際、明らかにされました。)

(2)西洋において親孝行は主として自然で純真な愛情と見られており、広池博士のいうような真の感謝の念に裏づけられたものではない。さらに愛情としての親孝行も、家庭の絆がゆるんだ結果、非常に弱体化している。

(3)英国王室は、その歴史が1000年足らずであり、かつ幾度も王朝の交替があった。しかも王たちの多くは、殺伐な暴君か、単なる悪人か、道徳的な虚弱者であった。英国民の王室に対する態度には、幾分アンビヴァレント(ambivalent, 愛着と反感を同時に感ずる)なところがある。

2. 伝統祭記念講演「伝統について」(ラワリーズ博士、6月4日)

この講演において、ラワリーズ博士は広池博士の伝統尊重の精神に対して深い理解と共感とを示され、聴講したモラロジアンに大きな感銘を与えられました。理論的な問題としては、マホメットやゾロアスターのような人も精神伝統の中に加えてはどうかという提案をされ、それが以後の討論課題の一つとなりました。

3. 公開研究会基調講演「伝統の原理と現代民主主義」

(ラワリーズ博士、6月7日)

この講演においてラワリーズ博士は、広池博士によって発見され提出された理念と原理が、もし広く世に受け容れられ実行に移されれば、どれだけ現在の民主的な生き方を改革し補強するのに役立つか、ということを示そうとされました。まず、民主的政治が十分な機能を果たすための基礎である「民主的な生き方」および「民主社会における理想的市民のタイプの特徴」を素描し、そのような人間の特質は、広池博士の描く理想の人間像の中に完全に含まれていること、さらに広池博士の理想の人間の記述は従来の民主的人間のそれよりも、より広く深く豊かで優れており、その特色を従来の人間像に追加すれば、民主主義の概念をより普遍的な価値に近づけ、安定させることができるであろう、と指摘されました。次に、現代において民主主義の理想や実践を脅かしている深刻な諸問題について、その徴候、直接的な原因、より深いレベルの原因というように分析を進められ、広池博士の教えが、まさにこの深いレベル、即ち、道徳的・知的・精神的レベルからこれらの諸問題を改善するのに役立つものであることを示されました。そして、民主主義社会がさらに成長して理想社会となるためには、その目的と実際の中に、最高道徳と「伝統の原理」を統合しなければならない、と結びました。

この日の質疑の中では、以下のような諸点が問題になりました。

(1)ラワリーズ博士にとって、「伝統の原理」は、人類の発明・発見等の過去に対する尊敬として、また生物的・社会的な遺伝に対する考え方として、一般論としては受容可能 (acceptable) であるが、広池博士の思想的背景を理解することは難しい。

(2)ラワリーズ博士から、西洋の学問の方法は一般論から各論に及ぶという意味で演繹的 (deductive) であるのに対し、広池博士が『道徳科学の論文』で採用されている方法もしくはスタイルは総合的 (synthetic)、即

ち事実とそれに対する考察を積み重ねることを通して総合的に論理を進展させてゆく方法であるとの指摘がありました。——これに対し研究部のメンバーから、広池博士の方法は主として帰納法と、中国および日本の伝統 (tradition) を受継いだ考証学である、という点の確認がなされました。

4. ラワリーズ講演をめぐる質疑応答と討論 (6月8日)

(1)前日、ラワリーズ博士が伝統尊重の精神について「過去に対する尊敬」(respect for the past) という、より一般的な概念で表現されたことに対し、研究部のメンバーから「伝統尊重の本質的原則は、……聖人の教へに基づく所の人間の道徳的努力の結果を尊重する」(『道徳科学の論文』第7冊2303～4頁) という広池博士の言葉を引用し、「伝統」の概念を適用する対象は、神につながる道徳的大恩人に限定するべきである、との提言がありました。ラワリーズ博士はこの指摘を受け容れつつも、「伝統」が人類の大恩人であるとするならば、その中に道徳的努力の他にも、科学者や芸術家の努力をも含めてよいのではないか、というように応答されました。ここで「伝統」という概念が意味する対象を、神の心を代行する道徳的努力に限定しようとする研究部の見解と、「伝統の原理」の主旨に基づきつつも、その概念を人類一般の精神的・文化的発展に貢献した人々の努力にも適用しようとするラワリーズ博士の見解との相違が明らかになりました。この相違は、ラワリーズ博士が、「マホメットの教えやゾロアスターの系譜を受継ぐバハイ教の教えにも普遍的道徳性に統合されるものがあるから、これらをも精神伝統の中に含めてはどうか」と提言された時にも問題となりました。

(2)前日の基調講演の中でラワリーズ博士は、「(広池博士は) 第三に、宗教的次元、特に宇宙的謙虚 (cosmic modesty) と呼ばれてよいものに導く深い神への信仰を強調しています」と述べられました。この cosmic modesty について追加説明を要望する声があり、それにつき、次のような応答がありました。cosmic modesty とは、まず第一に、宇宙を混沌 (caos) ではなく、コスモス (秩序と調和を維持している完全な体系としての宇宙) として

捉え、そのような宇宙の偉大性の前に立って畏敬の念 (awe) を感ずることである。cosmic modesty はまた、宗教的情操の発祥の地であり、神の観念もその中に含まれている、と説明されました。

(3)東洋と西洋との間には、^{エトス}ethos (基本的な感じ方・考え方) の相違があるが、西洋人にとっての「伝統の原理」の受容可能性(acceptability)はどうか、との質問に対し、ラワリーズ博士は、西洋人に「伝統の原理」を理解させるに当っては、次のような諸点が困難であろうと述べられました。

-1. じっくり耳を傾けさせること自体が難しい。概略だけ聞いて、ああそういうことなら (例えば) カトリックでも言っている、というように反応して、それ以上深く研究しようとはしない。

-2. 言葉・翻訳の問題として、例えば ortholinon はなじみにくい。多くの人々に強く訴えかける力を持った (mass impact を与えるような) 現代的表現を考えるべきだ。(5月10日付の手紙でも、西洋人は、自分達の用語は東洋の用語よりも正確で、科学的で、合理的で、常識に近いと考えており、単に言葉だけではなく、概念を翻訳する努力を充分に行なう者はほとんどいないでしょう、と述べられています。)

-3. 西洋では道徳的ないし宗教的なことがらと、科学的研究とを峻別すべきだとする考え方が根強い。

-4. モラロジーをはじめ東洋の教えは、寛容の精神に満ちているが、西洋の諸宗教は相互排他性が非常に強い。

-5. 西洋では、何か問題がある場合、それを外側 (surroundings) の問題として、技術的レベルで対応し処理しようとする傾向が一般的であり、心のあり方といったような道徳的真理の追求に目を向けることは少ない。

以上のように困難な点が多いが、モラロジーを西欧にも普及させるためには、テキストを英訳して多くの人々に読んでもらうというように、今までやってきたことをさらに規模を大きくしてやってゆくほかないと指摘されました。特に、モラロジーの教えを明確に打ち出して表現したテキストの必要性

を強調されました。

5. 公開研究会基調講演「伝統の原理について」(大塚善次郎講師、6月21日)

モラロジー研究所の本部指導講師である大塚善次郎氏は、研究所を代表する形で「伝統の原理」の基本的考えを解説し、ラワリーズ博士との相互理解を一層深めようと試みられました。大塚講師は最初に「まえおき」として、モラロジーという学問が記述的(descriptive)であると同時に教訓的(prescriptive)である、という学問的性格の二重性をとりあげ、この二重性が、普遍的な道徳的革新を呼び起すという目的をもつモラロジーの性格によって、意図的に採用されているものであることを指摘しました。

次に「伝統」の概念の一般の定義および「家の伝統」、「国家伝統」、「精神伝統」の各々についての詳しい説明を行い、各伝統が尊ばれるべき所以を示しました。最後に、諸伝統の大恩を受け、それらに対して尊敬と服従をしてゆくべき我々自身のあり方、感恩の精神を原動力としてなされる道徳行為の尊さ、さらにこの精神こそが人類を破滅から救うものであることを強調することを以て、大塚講師は基調講演を締めくくりました。

この基調講演に対するラワリーズ博士からの主な反応は以下のとおりでした。

(1)学問の性格における記述的 (descriptive) と教訓的 (prescriptive) との区別は、物理学等では明確であるが、医学等では不分明であり、不分明であることが直ちに変則的とは言えない。自然科学の分野で、この150年位、記述的科学が非常に発達し成功をおさめてきたので、社会科学や人文科学の分野でもそれに追随しようとする傾向が強くなってきた。しかし、記述性と教訓性とを区別することは有用ではあるが、その区別をおし進めすぎることは危険である。要は、真の融合 (true compound) と、事実のイデオロギー的配列 (ideological arrangement of facts) とを峻別することが大切なのである。

(2)価値はギリシア以来の伝統に従えば大きく真・善・美の三つに分けるこ

とが出来るが、それぞれに対応して「伝統」を考えることが出来るのではないか。即ち真理 (truth) に対応しては科学的伝統 (scientific ortholion) が、善 (goodness) に対応しては道徳的伝統 (moral ortholion) が、美 (beauty) に対応しては美的伝統 (aesthetic ortholion) が考えられるのではないか。

(2)の問題については、「大恩」の概念をどう捉えるかが問題であろう、ということになりました。

6. 大塚講演をめぐる質疑応答と討論 (6月22日)

(1)前日に引き続いて「科学的伝統」、「美的伝統」について討論が行われました。ラフリーズ博士は、最高善 (the supreme good) が道徳の領域であり、モラロジーの任務とするところもモラルの問題である、ということで、moral ortholion を特別に重視するというモラロジーの立場に歩み寄られました。しかし、芸術や科学の領域における偉大な指導者たちの作品のうちのいくつか、例えば、ミケランジェロによるシスティン礼拝堂の天井画、ベートーベンの第九交響曲などは、諸聖人の教え (message) を我々が理解し感得することを助けるのは確かであるから、それらの作品を精神伝統の一つと考えるとよいのではないかと提案されました。

(2)「伝統」(line of succession) におけるまっすぐな糸と、「伝統」と呼ばれ尊敬される個人との関係をどう捉えるかについて討論がなされました。そして、神に淵源してまっすぐにつながってきている糸とは、宇宙の真理 (cosmic truth) であり、「伝統」と呼ばれる個々の人間は、その糸にさし貫かれた真珠のようなものであって、そのような個人は宇宙の真理を担うものであると共に、「伝統」であるという自覚がその人のより高い品性を形成する働きを持つこともある、というような理解を共有するに至りました。ラフリーズ博士からは、さらに、篡奪者やヒトラーのような人間が「伝統」の座を占めたような場合にはどうするべきか、という問題が提起されました。

7. ラフリーズ博士提案「最初の試み」、および質疑応答・討論 (7月12日)

モラロジー研究所のメンバーとの最後の理論的討議の場を迎えるにあたり、ラフリーズ博士はこれまでの討議をふまえて、「最初の試み」と題する簡潔な提案書を提示されました。この提案書は、「伝統の原理」を欧米人にとって受容可能な形で表現することを試みたものであり、具体的には、国家伝統と精神伝統について試みておられます。

(1)国家伝統について

国家伝統 (national ortholion) とは、国民国家が成立して数百年経過するうちに形成されてきた「国家的性格」(national character) の中で道徳的な部分、即ち何が正しく正義であるかを規定する国民的原理 (national principles) を総体的に指し示す概念である。この国民的な道徳原理は、神および本体が歩んだ道であるがゆえに遵守すべき一つの真すくな道を形づくっている。

この原理が十全な生命力を持った現実のものとなるのは、それが生きた人間の中に具現された時である。国家伝統は国家の長において最も完全に具現される。しかし、もし国家の長が国家伝統にふさわしくない場合、その人物はその地位に長く留まることは出来ず、「伝統」(ortholion) は清められるであろう。

国家伝統は、一本の糸とおした真珠にたとえることができる。その真珠のいくつかは美しさに欠けているとしても、糸全体が立派なものであることには変わりがない。結び合わせる糸は、持続性と力を付加するものでなければならない。自然的血統つまり遺伝的連鎖が最も完全であるだろうが、選挙なども効果的な手段であることが実証されてきている。ところで、この糸は必ずしも一本と考える必要はないのではないかと。例えば、イギリスの場合、国家伝統は、王と議会と裁判所と教会という4本の糸がよりあわされたロープといった方がよいのではないかと。

(2)精神伝統について

聖人の教説は主として言語によって伝えられてきたが、言語は変化するし、また時代が進むにつれて直面する問題も変化する。従って、絶えざる再適応、再思考、再解釈、持続的教育が必要である。このような仕事は、学者だけでなく、実践によって教える聖人や、絵画等によって直観を表現する芸術家によっても担われてきた。従って、それを見聞きする時、心の底から感動して最高の存在に対して畏敬の念をもったり、その存在に目を開かれたり、その存在のより近くに導かれたと感じさせてくれるような「一部の芸術家の一部の作品」は、精神伝統の中に含めることが出来るし、またそうすべきではないか。

以上の提案に対する質疑応答および討論はほとんど国家伝統の問題に集中しました。まずラワリーズ博士が歴史的事実をふまえて、次のように補足説明をされました。欧州の王室で国家伝統と呼べるものはない。なぜなら日本の皇室の場合とは全く異って、それらは永続しておらず、王たちが道徳的な面での指導者 (moral guide) であったことはないからである。各国民の道徳性の向上は、王がいた故にではなく、王がいたにもかかわらず達成されてきた、と言った方が実情に近い。さらに、英国において、議会や裁判所や教会が、いかに国民的な道徳原理を守り育ててきたかについて説明されました。また、近代の西欧においては、三権分立が国家の基本構造となっており、この現実的構造の中で国家伝統を考えるとゆかねばならない。そして、三権を三つとも含むものでなければ国家伝統とは言えない、と主張されました。

これに対し、研究部のメンバーから、モラロジーでは、国家伝統の数や質などよりも、それに奉仕報恩してゆく国民のあり方の方に重点が置かれている、との発言がありました。しかし、ラワリーズ博士は、そのように対象の規定をあいまいなままにして、こちら側の精神的態度のみを云々する考え方は、欧米人にとって全く受け容れられないものである、と言明されました。つまり、世界の各々の国で、その国の国家伝統は具体的に誰(何)であるかを明確にすることが出来なければ、その国で「伝統の原理」は具体的な指導原理としての意味を持ち得ない、ということでした。このような討論の

結果、国家存立の道徳的基礎を確保し受継いでいるものは何か、国民の道徳性の維持・向上の基礎を担っているものは何か、現実の国家においてその統合・統一・秩序維持・進歩発展の要^{かなめ}となっているものは何か、要するに、実質的に国家伝統のはたらきを体現しているのは誰(何)か、を各々の国ごとに具体的に規定してゆく必要がある、ということが出席者の了解するところとなりました。そして出席者は、日本以外の国、例えばイギリスやアメリカ等の国家的・社会的状況の中で、国家伝統論をいかに展開してゆくべきか、各自の見解をまとめて、全員がラワリーズ博士にレポートを送ることになりました。もっとも、我々は基本的な精神のあり方を提示する以上のことは事実上不可能であるから、ある国で「伝統の原理」をいかに具体化するかは、その国の人に自分で考えてもらうべきだ、とする意見もありました。

研究部の下程勇吉顧問からは、次のような指摘がありました。(1)国家伝統は究極的には精神伝統によって基礎づけられている。(2)国家伝統論の核心は広池博士の国家哲学である。(3)広池博士が理想として描いていた国家および国民は、根底を神の大字宙の原理 (cosmic moral principle of God, その内容は慈悲寛大自己反省の精神を中心としたものであり、それを並優れて具現化したのが天照大神および日本の歴代の天皇であった、とする) に基礎づけられた道徳国家 (moral empire) であり、それに参加する国民 (people) である。

下程顧問の指摘により、討論はますます熱気を帯びつつ核心である精神伝統の問題に移行しようとしたのですが、時間切れとなりました。

III おわりに

今回、ラワリーズ博士と回を重ねて討議をした事によって、我々は次のようなことを痛感しました。まず第一に、言葉や概念の翻訳の問題から「精神」の伝え方の問題に至るまで、異った文化的伝統を背負った者どうしが真の「対話」を成立させるためには、比較思想・比較文化的な観点に立った具体的方法・工夫が不可欠であることを痛感しました。

第二に、日本とは文化的・社会的に異った状況の中で、その具体的現実に

即しつつ「モラロジーの精神」を展開してゆくことも、我々モラロジー研究者の大きな課題であることを認識しました。

(文責：モラロジー研究所研究部研究生 鈴木康之)